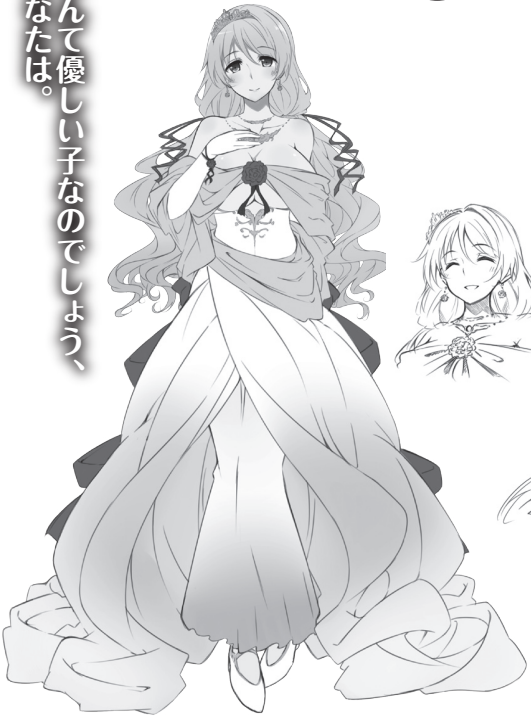
小説　栗栖ティナ
挿絵　竹馬2号

登場人物紹介

Characters

なんて優しい子なのでしょう、あなたは。



ソフィ

魔王との戦いで戦死した夫の代わりに、ビヴォワンヌに住む人間を統べる女王。両親を失ったケリーの保護者でもある。僧侶としての力も国内随一。

ケリー

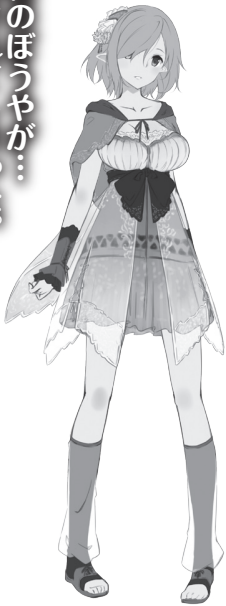
日本に住んでいた社畜の青年が転生した少年。魔王と相討ちとなった勇者と賢者の子供で、新たな勇者として立ち上がった。

よくぞ我が全力を出せるまでに成長してくれた！

カミラ

ケリーの知り合いの魔族の女性。世界中を旅していて、たまにケリーのもとに現れては剣の稽古をつけてくれる。しかし、その正体は……!?

私のぼうやが…汚されてしまった。



エリザ

エルフのような尖った長耳を持つ妖精族の女王。予知夢を見る能力を持っている。ケリーのことを気に掛けているようだが……!?

死後の幸運　007
プロローグ　現実となった『幻想（ファンタジー）』　011
一　章　旅立ち前の目的達成（クエストクリア）　047
二　章　すべてを『出し』きる！　師弟対決　079
三　章　統一王伝説　141
四　章　そして勇者は王となる　187
エピローグ　いつまでも可愛らしく　231

プロローグ　現実となった『幻想（ファンタジー）』

「皆の者……彼（か）の者が新たなる救世主。この美しき世界『ビヴォワンヌ』に住まう、我ら人族（ヒューム）の明日のために旅立ちを決意した若き勇者、ケリーです」

城下町を見下ろす、別名『水晶の城』と称される美しきレーヌ城。

大勢の民衆が集まった中庭を見下ろすバルコニーに立つのは、この城を統（す）べる女王、ソフィ＝レーヌ。

その姿を、ケリーは一歩下がったところから見守っていた。

（それにしても……こういうときのソフィ様、凄く威厳があって綺麗だよなあ）

心安らぐような慈愛に満ちた瞳。口元をわずかに緩めて微笑む姿は、まるで天から降臨した女神を彷彿とさせる美しさだ。

彼女が身にまとう、王家由来のドレスもその神々しい雰囲気をより盛り上げている。

破邪の魔力が込められた水晶布で織られたドレスは陽光を受けて眩く輝く。ほっそりとした腰はコルセットで締められ、それ故（ゆえ）に大きく開いた胸元から今にもこぼれ落ちそうな乳房の大きさが一層強調されていた。

女王の証であるティアラで飾られた髪は、まるで金糸のよう。少しウェーブのかかった

それは肉付きのよい尻房の辺りまでの長さがあり、風に吹かれて小さく揺れていた。
「……ケリーくん？」
「えっ、あ、は、はい！」
見とれてしまっていた少年勇者は、小首を傾げる女王に促されて我に返った。
（ぼんやりしている場合じゃなかった。それにしても……緊張するな）
今、自分は女王に認可を受けた勇者としてここに立っている。ぼんやりとしていたらソフィにまで恥をかかせることになると気づき、慌てて彼女の横に歩み出た。
自分に集まる、縋るような期待の眼差し。父譲りの明るい茶色の髪を落ち着きなくかき上げながら、ケリーは何とか気持ちを静めようと深呼吸を繰り返す。
年のわりにはあまり背丈が伸びず、顔立ちも『ドレスを着れば女の子で通じる』と剣の師匠にからかわれたことがあるくらい、あどけない可愛らしさ。
普通にしていては頼りないと思われるだろうし、せめて胸を張って堂々と立つ。……それすらも、傍目には[illegible]が一生懸命大人ぶろうとしているだけに見えるかもしれないが。
（あとは……どうしよう。軽く手を上げて応えるとかしたほうがいいのかな？）
「大丈夫。ケリーくんは難しいことを考えず、笑顔でいてくれればいいのよ」
悩む少年勇者に、すぐ隣に立つ女王が小声で優しく語りかけてくれた。その声を聞いただけで不自然に高鳴っていた鼓動が静まり、強張っていた身体も解(ほぐ)れてきたようだ。

「わかりました。ありがとうございます」
言われたとおりに背筋を伸ばして立ったケリーは、目配せでそっと自分を気づかってくれた隣の美女へお礼の言葉を返す。
そんなケリーの姿を一瞥して微笑んだ女王が、ようやくざわめきが収まりつつある民衆を改めて見渡し、白い長手袋に包まれた両手を双乳の前で祈るように重ねた。
「先の大戦が終わって十年。わたくしの夫である先王、そして勇者夫妻……多くの犠牲を払って手に入れた平和が、今、再び脅かされようとしています」
左手の薬指を飾るダイヤモンドの指輪――今は亡き夫との絆の証を一瞥したソフィは、込み上げてくる様々な思いを飲み込むように軽く唇を噛む。
「好戦的であった先代魔王が勇者と相打ちに倒れて以降、領内から出てくることがなかった魔族（デモン）達の動きが再び活発になっているという話は、既に皆も耳にしているでしょう。国境付近の村がいくつか、襲撃を受けて壊滅したとの報告も届いています」
ソフィの話に集まった民衆達がざわめく。
先代魔王に率いられた魔族軍との激戦の記憶は、彼らの中に生々しく残っている。
友が、家族が、恋人が犠牲になっていく、血で血を洗う戦い。その悲劇がまた繰り返されるのだろうかという不安を拭えないのだろう。
空気が重くなる中、女王はそれを振り払うような力強い声で言葉を続けた。

「ですが、臆することはありません。わたくし達の窮地を救うため……若き勇者は自ら名乗りを上げてくれました」
そう言って女王は右手を少年の肩へそっと置く。
いつもなら頭をそっと撫でてくれるところなのだが、さすがに人前でそれは彼が恥ずかしがると気を遣ってくれたのだろう。
「亡き先代勇者の血を引くこの少年……ケリーは明日、旅立ちます。魔族の動きを探り、その裏で暗躍している者を討伐するために」
ソフィの言葉に合わせ、民衆達の期待に満ちた眼差しが少年へ向けられる。
（よし……少し、格好つけておかないと！）
服越しにも伝わってくる、手の平の柔らかい温もり。彼女の期待に応えたいという思いに緊張も吹き飛び、ケリーは腰にぶら下げた父の形見である長剣を抜き掲げた。
咄嗟のことで気の利いた台詞は浮かんでこない。だが、まだ幼さの残る少年が見せた精一杯の勇ましい姿はそれだけで十分に民衆の心に訴えかけるものだった。
「勇者万歳！」「若き勇者に祝福をっ!!」
民衆から沸き上がる、盛大な拍手と歓声。
飲み込まれてしまいそうな迫力に思わず後ずさりしそうになりながらも、隣に立つ女王を一瞥してどうにか堪える。

夫の後を継いで国を統べる立場に就いて十年、もうこうしたことにも慣れているのだろう。ソフィは穏やかな笑みを浮かべたまま眉一つ動かさない。
（やっぱり、こういうときのソフィ様は凄いな）
この世界、『ビヴォワンヌ』唯一の人族が統べる王国レーヌ。
その女王である彼女の凛々しく美しい姿に改めて感心しながら、少年は気づかれないように小さく苦笑を浮かべた。
（でも、やっぱり僕はいつものソフィ様のほうが好き……かな。ははっ）

「お疲れ様、ケリーくん！　大丈夫？　疲れなかった？」
「むごっ、んんむ⁉　ふぁ、ふぁいっ、らいじょ……んっ、く、くるしっ」
「えっ、苦しいの？　緊張しすぎて、お腹痛くなっちゃった？」
「ちがっ……んぷっ、はぁはぁ、く、口が塞がってて……ははっ」
ケリーはうろたえるソフィへ上目遣いで答えつつ、首を軽く横へ振って自分の顔を挟むぷにぷにのお餅みたいな球体――彼女の乳房の谷間から顔を離した。
旅立ち前のお披露目を終え、限られた側近の者だけが立ち入ることを許された女王の私室へ戻った直後、胸元にこうしてきつく抱き締められてしまったのだ。
（大きいよな、ソフィ様のおっぱい。柔らかくて、温かくて……はふぅ）

頬に伝わってくる、程よい温もりと弾力。
心身が蕩けて、いつまでも浸っていたくなる極上の心地よさだが、柔軟に弛み潰れる柔肉に鼻も口も埋まってしまっていて息苦しく、長く耐えることができない。
それに、部屋の中には打ち合わせにやってきた大臣達や警備の兵士もいるのだ。
今までにも散々見られていることだし、彼らも『いつものことだと』と苦笑を浮かべるだけで特に何も言ってこないが、それでも気恥ずかしさは拭えない。
（こういうところは、まだ馴染めないんだよな……はは）
まだ背丈はちょうど彼女の胸くらいまでの高さ。顔つきにも幼さが残っているし、その容姿に見合った子供らしい態度で素直に甘えればいい。
そう思うのだが、脳裏に残る青年としての心にどうしても邪魔されてしまう。
我ながら困ったものだと思いつつ、ケリーは改めて女王を見上げる。
「あら、ごめんなさい。ふふっ、今日のケリーくんがとっても立派だったから、私ったらつい嬉しくなっちゃって」
そう言いながら、小さく舌を出して悪戯っぽく微笑む女王。
先ほどの神々しい美しさとはまた違う、人懐っこい愛らしさが浮かんで見える。
小さい頃からずっと見守り続けてくれた笑顔に、少年勇者の表情も自然と和らぐ。
「ありがとうございます。ソフィ様に恥をかかせちゃいけないって思って、何とか頑張っ

てみたんですけど……上手くできてよかった」
「そんなに気を遣わなくていいのに。それにしても……時が経つのは早いわね。小さかったケリーくんが、こんなに立派に成長して……」
「ソフィ様のおかげです。本当に……色々お世話になりましたから」
しみじみと呟く女王の優しい眼差しに、ケリーは感謝を込めて答える。
（僕、ソフィ様がいなかったらどうなってたか……小さい頃から激動の人生だもんな。まあ……半分は自業自得なところもあるんだけど）

――転生して、憧れのファンタジー世界に産まれる。
しかも後でわかったことだが、両親は人族を代表する勇者とその長年のパートナーであり、あらゆる魔法に長（た）けた大賢者と呼ばれる人物だったのだ。
まさにファンタジー世界ではエリート中のエリート。
もう薔薇色の未来が約束されたと思って浮かれていた。
だが――現実はそう甘いものではなかった。
最初に彼を襲った不幸は、物心ついたばかりの頃に両親が先代の魔王との戦いで揃って帰らぬ人となったことだ。
引き取ってくれる親類もおらず、天涯孤独の身となってしまったときには、再スタート

したばかりで早くも人生が詰んでしまったと頭を抱えた。
だが、そんな彼を、魔王軍の襲撃で逝去した王の後を継いで即位したばかりのソフィが引き取って育ててくれたのだ。
これで一安心。両親を失った悲しみを乗り越え、可愛い幼なじみをたくさんつくって前世で夢見ていたハーレムでも築いてみようと野望を燃え上がらせた。
城で暮らすようになり、自然と貴族の見目麗しい少女達と知りあう機会も多くなる。
前世では味わえなかった、同世代の少女との甘酸っぱい恋。それを存分に楽しみたいという思いに、その頃の自分は突き動かされていたのを思い出す。
それには格好よく頼もしい姿を見せるのが一番と、剣や魔法の修業に精を出した。
両方とも国内に並ぶ者がいないほど極められたのは、両親の才能を受け継いだおかげなのだろう。それとも転生のとき、こっそり神様から成長率にチートなスキルでも授かっていたのかもしれない。
勉学に関しては前世の知識が役立った。学力レベルではこちらの世界は圧倒的に劣っていて、向こうでは中の中以下だった自分でも神童扱いされるほどだ。
それで調子に乗りすぎてしまったのを、今でも少し悔やんでいる。
(何事も、やりすぎはよくないよね……やりすぎは)
二度目に少年を襲った不幸は、『前世の知識を上手く生かせば、この世界での生活をよ

り快適にできるのではないか』と思いついたことだ。

最初に着手したのは、乗り心地の悪い木製の輪を取りつけただけの馬車。

ゴムが存在することを知り、うろ覚えの知識を総動員してそれを加硫して合成ゴムに加工する技術を確立させ、前世で一般的だったようなチューブ式タイヤを発明。

疫病対策としては糞尿を堆肥として利用する方法を提案し、国中の衛生状態がそれで大幅に改善された。その他にもマヨネーズや味噌といった比較的開発が容易な調味料を再現したり、炎の魔法を利用した熱気球を作り出したり。

魔法という、前世の科学をある部分では超越しているものがあったおかげで、少年勇者が考えていたよりも順調に物事は進んだ。……進みすぎてしまった。

（あの頃は大変だったな。毎日、可愛い女の子達が群がってきて……夢に見たとおりだと思って喜んでたのに……みんな、僕の力目当てだったなんて酷すぎるよ）

次々と革新的な技術を提供し続けたケリーは、魔族との戦いで王を失い、ソフィ女王による体制がまだ整っていなかった国の貴族達の目には宝石のように映っていたのだ。

彼を一族に引き込めば、大きな権力を手にすることができる。

それには自らの娘をあてがうのが一番早い。当時、少年勇者に近づいてきていた貴族の令嬢達のほとんどは、そんな使命を受けた者達ばかり。その状況を問題視したソフィが解決に乗り出し、そのときになってケリーは初めてその事実に知ることとなった。

（おかげで、完全にトラウマだもんな）
中には純粋に好意を持って近づいてきていた子もいたのだろうが、前世でも恋愛経験が皆無だったケリーにはそれを見抜くことができない。同世代の女の子達すべてが信じられなくなり、今でもまともに目を合わせて話すことすらできない状態。
薔薇色どころか、第二の人生は波乱の連続だった。

「ふふっ、本当に今日のケリーくんは格好よくて、可愛かったわ♪」
自分を見下ろし、優しく微笑むソフィ。
新婚早々、子供をつくる前に夫を失ってしまった優しき女王は、救国の英雄の遺児であるケリーを自らの子のように優しく慈しんでくれた。
（ソフィ様がいなかったら、僕……とっくにダメになってたよ）
前世で嗜んだゲームやマンガとは違う、現実故に様々な問題が多いこのファンタジーな世界で生きてこられたのは、すべて彼女のおかげだ。
母のような女王の双丘に抱き締められたまま、そんなことを振り返っていた刹那。
「失礼するわ」
まるで鈴の音のように澄んだ声と共に、一人の女性が部屋に入ってきた。
少し気だるそうなブラウンの瞳。雪のように白い肌。顔立ちは精巧に作られた人形のよ

うに少し冷たさを感じさせる美しさだ。
肩を覆う瞳と同じ色ケープには触れない程度の長さの髪は、春の草原のようなエメラルドに似た緑色。前髪の一房が右目を隠し、神秘的な雰囲気を醸し出している。
背丈は女王よりも少し低く、身体もほっそりと引き締まっている。
髪と同じ緑のワンピースドレスと、透明の羽根を模したデザインの腰巻き。その端から伸びた脚はスラリと長く、抜群のスタイル。
それでいて胸元は十分なふくらみがある。ワンピースドレスの胸元から上乳が覗き見えるそこは少年の両手を使ってようやく片方を包めるほどの大きさだ。
そして何より特徴的なのは、その髪から覗く耳。
横長の三角形で先端が尖ったそこは、少年や女王の丸みを帯びた耳とはまるで違うもの――彼女が『人』ではない証である。
女王の私室。この城の中枢部とも言える場所に現れた美女に、控えていた警備の兵士達が槍を構えて歩み出てくるが――ケリーを抱いたままのソフィが片手でそれを制する。
「まあ、お久しぶりです、エリザ様。いつ、こちらへお越しになったのですか？」
「今、さっきよ。駐在している大使から嫌な知らせを聞いて……ね。転移の魔法陣を設置してあるここなら、行き来に時間はかからないもの」
笑顔で迎えるソフィに、エリザと呼ばれた長耳の美女が冷たく返す。

壁際に並ぶ大臣達の中から、『転移魔法は緊急時以外の使用は禁じられているはず』と小声の抗議が上がる。だが、エリザはそれに構うことなく不機嫌そうに目を細め、女王に抱き締められたままの少年勇者をじっと見つめた。

「どうも、ご無沙汰してます、エリザ様！　お元気そうで何よりです」

部屋に漂う張り詰めた空気を吹き飛ばすように、ケリーはわざとらしいくらい元気に呼びかけた。いや、無理にそうしようとしなくても、この美女を前にするといつも自然にテンションが上がってしまうのだ。

（何度見てもいいよなぁ、リアルエルフ耳！　ファンタジーにはこれがないとっ!!）

長耳と緑の髪が特徴的な彼女は、この世界『ビヴォワンヌ』では『妖精族（エルフ）』と呼ばれている種族を統べる、女王だ。

長命で見目麗しく、長い耳と他種族を超越した魔法力。

ケリーが持つ前世の記憶にある、『エルフ』そのものの特徴を持っている。

ファンタジー世界ではヒロインとして必ず一人は出てくるお約束の種族。

『いつまでも若くて綺麗なエルフ嫁欲しい！』なんていう妄想を、お気に入りのマンガを読む度にしていたものだ。

ただ、この世界では種族ごとに支配する地域が離れているし、交流も活発ではない。

だから、実際に会う機会はそれほど多くなく、こうして顔を合わせるときにはついつい

嬉しくなってしまうのだ。
「元気そうで何よりね、ぼうや。ところで……私に届いた報告は本当なのかしら。ぼうやが勇者として、侵攻してくる魔族軍討伐の旅に出るというのは」
少年の挨拶に一瞬だけ口元を緩めたエリザだったが、すぐ不機嫌そうに眉を顰めて問いかけてきた。
「はい、そうですけど」
「私が前に話したことを忘れたの？　力を持つ者には、それを利用しようとする浅ましい害虫が集まるものだから気をつけなければいけないと」
隠すことでもないとすぐに肯定した少年勇者に、長耳の美女は大げさに天を仰ぐ。
「いや、それは覚えていますよ。でも……」
「それなら、どうしてそんな無謀なことを決意したの？　ぼうやはまだそんな年ではないでしょう。もう少し、自分を大切にしなさい」
言葉を遮るようにヅカヅカと乱暴な足取りで近づいてきたエリザが、少年の両肩を力任せに掴んで乱暴に引き寄せた。
「うわっ、ちょ……な、何!?」
ソフィの胸から解放されたケリーは、そのまま長耳の美女に背中から抱き締められる。
まだ彼女の胸程度の背丈しかない少年の後頭部は、ポフッと音を立てて美乳の谷間に埋

まり、耳の辺りが心地よい弾力に圧迫された。

ふわりと漂ってくる薔薇の花のような匂いは香水だろうか。この美女に抱き締められているという喜びを改めて実感させてくれ、鼓動が高鳴ってしまう。

離れて話の続きをしなければいけないが、もう少し浸っていたい。

少年がその葛藤に苦しんでいた刹那、長耳の美女は深くため息をついた。

「こんな[redacted]に重責を押しつけるなんて……人族は相変わらず野蛮で依存心が強い、救いがたい連中ね」

続けて吐き捨てるように放たれた言葉に、大臣達や警備の兵の表情が強張る。

「エリザ様、我ら人族そのものを愚弄するのですか！」

「っ……高慢な長耳が！」

怒りに声を震わせて訴える大臣。兵士達はもう取り繕うこともせず、嫌悪を剥き出しにして構えた槍の先を長耳の美女へ向ける。

「事実でしょう。すぐにそうやって武力に訴えるのだから。それにこの子の父親のことを忘れたというの？『勇者』という都合のいい言葉で魔王討伐の任を押しつけ、まだ小さな[redacted]から両親を取り上げた……その上、今度はこの子まで犠牲にしようというの？」

殺気立つ雰囲気に取り乱すことなく、エリザはあくまで淡々と冷静な口調で返す。

だが、少年の肩から胸元へ滑り落ちてきた手には力が籠もり、小さく震えている。

「エリザ様……」
そこから彼女の自分を気づかってくれている気持ちを察し、ケリーは胸が熱くなった。
年に数回、女王同士の会談のためにこの城を訪れる彼女を見て、『本物のエルフだ』と心の中ではしゃぎ、何とか仲よくなりたいと思ったものだ。
最初の頃は面倒臭そうに素っ気ない対応をされていたが、少年がめげずに笑顔で話しかけていると、いつしかちゃんと相手をしてくれるようになった。
『この城で、上辺ではなく、本音で私を歓迎してくれるのはソフィとぼうやだけ』
あるとき、エリザが特徴的な三角耳を弄りながら呟くのを聞いたことがある。
妖精族への差別意識が強いこの城で、無条件で好意を抱いている自分の存在が嬉しかったのだろうと、ケリーはそのときに察した。
「ソフィ、あなただけはこの子を心から大切に思っていると信じていたのだけれど、私の見込み違いだったのかしら？」
胸に抱かれたままそんなことを考えている間に、エリザは射抜くような鋭い視線で悲しげに目を伏せるソフィを問い詰めていた。
「エリザ様の仰るとおりです。わたくし達は……」
このままでは自分の大好きな二人の仲に亀裂が入ってしまう。
そう危機感を覚えた少年は――。

「いやいや、ちょっと待ってくださいって。全部、僕のわがままなんですから！」
そう言って、咄嗟に割って入った。
壁際の兵士達が放つ殺気も強くなっているし、猶予はない。
このまま、張りのある長耳の美女の乳房枕に浸っていたいところだが、その誘惑をどうにか振り払って彼女から身体を離す。
「ソフィ様にはずっと反対され続けていたんですよ。それでも僕が無理にお願いして……だから、悪いのは全部僕です！」
ケリーは母代わりの女王を背に庇うように立ってエリザを見上げ、事情を話す。
魔族に不穏な動きがあり、本格的な調査が必要と話が上がったのは一年前。
だが、送り出された騎士達は誰一人帰ってくることはなく、見るに見かねてケリーが自ら旅立ちを志願したのはもう半年も前になる。
『まだ小さなあなたに、そんな重荷を背負わせられない』
そう激しく反対する女王を説き伏せるため、国内有数の騎士や魔導士達との模擬戦で勝利を重ねて実力を誇示し、彼女同様『優秀な人材をむざむざ死地へ追いやれない』と反対していた大臣達を先に説き伏せて協力を要請し……半ば強引に、やっと許しを得たのだ。
「どうしてなの、ぼうや？　まさか、ただ『勇者』への憧れだけではないでしょうね」
ケリーの話を聞いても尚、納得できないと不機嫌そうな顔で腕を組むエリザ。

ソフィも彼女の言葉を聞いて、やはり旅立ちを許したのは間違えだったのではないかと思い始めたのか、表情が曇ってきている。
お披露目も済ませたのに引き留められるわけにはいかない。
ケリーはちょっと気恥ずかしいのを我慢し、本音を吐露することにした。
「僕、ソフィ様やエリザ様……大好きな人達を守りたいんです」
正面のエリザと背後のソフィ。二人を交互に見つめ、真っ直ぐ訴える。
「っ！　ぼ、ぼうや……」
「ケリーくん、あなた……」
突然の言葉に驚いたのか、美女達は揃って目を丸く見開く。
白肌がほのかに色づいて朱に染まり、動揺を訴えるように瞳がわずかに潤む。
その大げさなくらいの反応を『可愛い』と思いながら、少年は言葉を続ける。
「また魔族との間に大きな戦争が起こったら、人族にも妖精族にも大きな犠牲が生じるはずです。そうなれば二人が悲しむだろうし……傷つくかもしれない。僕、そんなの絶対に見たくありません！　だから、そうなる前に何とかしないと。大丈夫、立派な勇者になれるよう、今日まで修業を頑張ってきました。ちゃんと成し遂げて帰ってくる自信もあります。だから……任せてくれませんか？」
決意を訴え、ちょっとおどけた雰囲気も出そうとサムズアップを決める。

「大好きな私のため……でも、そんな……」
「わたくしは……」
少年の思いに圧倒されたのか、エリザもソフィも頬を赤らめたままうつむき、何か小声で呟くだけだった。
上手く押しきれたらしい。あとは話が蒸し返されないように切り上げるだけだ。
「心配してくれてありがとうございます！　僕、必ず元気に帰ってきますから。じゃあ、旅立ちの支度をしなきゃいけないので……エリザ様、途中まで送りますよ」
「え、ええ……」
「ソフィ様、それではまた後ほど……失礼します！」
ケリーはそう言って長耳の女王の手を取り、慌ただしく部屋を後にした――。

「……ファンタジーの世界も実際に生きてると、色々あるよな」
エリザを城の地下にある転移魔法陣の部屋まで送った後、ケリーは城の裏庭に置いてある馬車の点検に向かいながら、先ほどの修羅場を思い出して肩を落とす。
『高慢なエルフは人を見下しがちで、それがトラブルの火種となる』
前世で好んでプレイしたゲームなどではお約束の展開だったが、この世界では種族の間により深い溝があるのだ。

前世でも今世でも味わったことがない、正体不明の感覚。
少年は言葉にならない喘ぎを漏らしつつ、ただ昇り詰めていくしかなかった。
「ふふっ、いい声だ。人族の女王よ、やはりケリーは我の胸のほうが好きらしい」
「そんなことはありません、わたくしのおっぱいにもビクビクと気持ちよさそうな脈動が伝わってきています。こうして……同じようにすればぁっ！」
勝ち誇るように切れ長の眉を上げたカミラを一瞥し、ソフィもまたそれに張りあおうと歪な形に揉み潰した爆乳を上へずらしてきた。
限界以上にふくらんだ亀頭の左側も柔らかな乳肉に包み込まれ、大きく揺さぶられる動きに合わせて雁首を弾かれる。
「ひあっ、あっ、あああ！　うっ、んぁぁっ⁉」
（ソフィ様、待って……何かくるっ、僕、きちゃうっ！）
左右、それぞれに弾力も温もりも揺れ動くタイミングも違う。異なる刺激を息つく間もなく与えられ続け、いよいよ少年の意識が途切れそうになってきた。
射精の予感とはまた違う、もっと切羽詰まった何かが込み上げてくるのを感じる。
「ケリー、また果ててしまえ。我の胸でこの可愛らしいちんぽをいじめられて、ビクビクと可愛らしく震えながら真っ白な精液を出すんだ。ほら……」
「ケリーくん、わたくしのおっぱいでたくさん感じて。いい子、いい子って、たくさんお

ちんちん撫でてあげるから。だからぁ……♪」
「ふぁひっ、いぃっ、らめ……いっ、あっ、あひぃっ、ひいいいい！」
甘く上擦る声で少年勇者を促し、乳房を揺さぶる二人の女王。
雁首を弾かれ、腫れぼったくなった亀頭を執拗に圧迫される。その耐えがたい刺激に、ケリーが悶絶しながら喘ぎ叫んだ直後。
びゅううううっ、びゅびゅっ、びゅうううう！
「ひふぁっ、あっ、んあああああ！　イィッ、ひぎぃっ、イイイイッ!!」
言葉にならない悲鳴のような声を上げる少年勇者の肉槍から、噴水のように精液でも尿でもない、透明の液体が迸った。
「んぁっ……な、これは……精液ではない？」
「透明なお汁が、おちんちんの先からいっぱい噴き出て……あぁっ」
それを間近で浴びる女王達も、想定外のことに驚き動きを止めてしまう。
（何なの、これ……し、潮……潮吹き？　僕、男なのにっ……）
苦しいのか気持ちいいのかもわからない。強烈すぎる刺激に飲み込まれたケリーは、薄れゆく意識の中で断続的に噴き出るそれを見ていた。
男でも潮吹きをすることがあるのは、前世の知識で承知済みだ。
それをこんな風に美女二人に責められ、自分自身がすることになるなんて。

（凄すぎる、これ、凄い……しゅごぉ……あはぁっ）
「……ケリーくん？　しっかりして、ケリーくん！」
「お、おい、ケリー……大丈夫か？」
「あはっ、まっひろぉ……僕、もぉっ、あはっ、あははっ……」
異変に気づいて慌てふためく女王達の声を聞きながら、少年勇者は遠のく意識を繋ぎ止めることができず――夢見心地の気分のまま失神してしまった。

「んっ、あぁ……」
「気がつきましたか、ケリーくん？」
「……済まん。少し調子に乗りすぎた」
ゆっくりと意識が覚醒して薄目を開けた少年の視界に飛び込んできたのは、涙ぐみながら心配そうに見下ろすソフィと、気まずそうに視線を泳がせるカミラの顔だった。
後頭部に感じるのは、馴染みあるふとももの柔らかさ。どうやら、金髪の女王に膝枕された状態で地面に寝ているらしい。
「二人とも……んっ、ははっ、す、すいません、僕……」
謝りつつ、少しよろめきながらも身体を起こす。
後始末は二人がしてくれたようで、衣服は既に整えられていた。

透明の腰巻きを羽根のように舞い上がらせ、頭から花飾り付きのカチューシャが落ちてしまいそうなくらいの勢いで、貪るように腰を揺さぶるエリザ。

少年の口内に差し込まれた舌もより熱く火照る。頬の内側や歯の裏側、そして舌。あちらこちらを舐め回されていると、まるでキャンディのような甘い味わいが広がってきた。

「ぼうや、もっと、もっと感じなさい。何もかも忘れて私に溺れて……そうすればあなたは幸せになれ。そう……辛い運命を逃れられるからっ、だから……」

「っ……エリザ様、僕、僕ぅ……ちゅっ、んちゅうっ、ああっ」

快楽に赤く染まった頬を緩めながら、今にも泣き出しそうな目で訴える心優しい妖精族の女王。彼女のその想いに胸を締めつけられながら、少年勇者は言葉にできない愛しさと感情の昂りを伝えようと、ひたすら舌を絡めて激しいキスを続ける。

唇の端からは唾液を零し、結合部からは破瓜の証で淡く色づいた蜜汁を撒き散らしながら激しく求めあう。

胸板を撫でる双丘の柔らかさ、指で執拗に摘まみ捻られる乳首の耐えがたい疼き。

そして口内いっぱいに広がる、愛しい女王のバニラのような甘い香り。

熱く責められる肉竿はもちろん、全身で味わわされている様々な快感が一つになって少年勇者を飲み込み、彼を絶頂へ向けて盛り上げていく。

「エリザ様ぁっ、も、もう……僕っ、あひっ！　イク、はひっ、くううっ!!」

ギュッと熱く締めつけられる肉竿に込み上げてくる、狂おしい射精の予感。
それを思う存分放ちたいという想いに意識を支配された少年は、快楽で蕩けた情けない声で必死に訴えることしかできなくなっていた。
（また、僕……リードするどころかいっぱい責められて、感じて……）
誰が相手でもこうなってしまうなんて、つくづく情けない。
だが、この激しく搾り取られる快感に溺れつつあるのも事実。
頭の芯まで痺れる強烈な射精衝動に翻弄されつつ、少年は潤んだ瞳で自らに覆い被さる長耳のクール美女へ訴える。
「出したい……僕、い、いっぱい射精したいですぅっ、精液ドクドクしたいよぉ」
「ええ、来なさい、ぼうや。私の中にいっぱいっ、ぼうやの熱い精液……思う存分出して……来て、一緒に……私も一緒にっ、くっ、ううっ!!」
恍惚と蕩けた少年の求めに答え、妖艶な笑みを浮かべたエリザは右目を隠す髪の一房が舞い上がるほどの勢いで腰を落とした。
ずっぷりゅぅ、ずぶっ、ずぶぶぶっ!!
愛しいケリーへ少しでも多くの快感を与えたい、そんな想いを表すように締まる膣壁とその表面で蠢く肉皺。ねっとりと舐めしゃぶられながらその中を突き進む屹立が、最奥の子宮口へ亀頭が埋まるような勢いでぶつかった。

ダメ押しとばかりに乳首を乱暴に引っ張られ、呼吸できないくらい唇をしっかり重ねられたまま舌同士が絡みあう。

全身を美しき三角耳の女王に愛してもらえている。前世では想像もできなかった悦びに包まれた少年はそのまま一気に昇り詰めていった。

「イクッ、僕……出るぅっ、出ちゃうっ、あはっ、あああっ！」

びゅるうううっ、びゅぶっ、どっぷっ、びゅうううう！

「あふっ、んっ、くううう！　し、子宮に流れ込んでくるっ、ぼうやの想い……精液、たくさんきて……あぁっ、私……イッ……イク、あひぃっ、ふぁあああ!!」

膣内で怒張が白濁を迸らせる小さな音と共に、全身を小刻みに震わせるエリザがうっとりと絶頂の叫びを上げた。

声に合わせて膣内が断続的に収縮し、屹立が搾られる。

その圧迫感に応えて幹胴はより太くふくらみ、さっきエリザの舌で丁寧に舐め転がされた陰嚢から、すべての白濁が尿道へと昇ってくるような長い吐精が続く。

「ふぁっ、あふっ、あぁっ、僕、もう、あひっ、はぁはぁ、ううっ」

「ちゅっ、くんっ、はぁ、子宮、もういっぱいなのに……まだ出るのね。素敵よ、ぼうや……勇者らしい、たくましい射精……私を愛したい……赤ちゃんを作りたいと必死におねだりしてくるような射精、好き……大好き」

「素敵です、ケリーくん。もっと……突いてっ、わたくしを感じてください！」
ソフィが軽く背筋を仰け反らせ、金糸のような美しい髪を振り乱しながら喘ぐ。
その昂りに合わせて、膣内の締めつけが今までの何倍もきつくなった。
「ひぐっ、ふぁああっ、ソフィ様、きつっ、んくっ、あああっ⁉」
壁面に雁首が深く埋まり、竿の根元を締まる膣口に噛み締められる。
腰を振ることもできないくらい捕らわれた状態で、大きく波打つ肉壁に幹竿全体がねっとりと熱く舐めしゃぶられた。
「はふっ、んっ、あぁ、硬い……初めてのときより、ずっと硬くて、大きくなったおちんちん……わたくしのおま○こで『男』にしてあげたおちんちん、立派に成長して素敵、嬉しい……嬉しくて、もっ、もうっ、あは、あああっ♪」
青い瞳をうっとり細め、綻ぶ唇から小さく舌先を覗かせて喘ぐ金髪の女王。
屹立の形をじっくり味わうように蠢く肉壺の動きに、今日こそは自分がリードしようと硬く決意した少年勇者はあっさりと蕩け崩れていく。
「ソ、ソフィ様、待ってぇ……僕、こんなっ、くっ、んんっ、イッ、ああっ」
我慢できずに喉奥から込み上げてくる嬌声を漏らし、身体をくねらせる。
膣内は肉皺の一本ずつまでもがケリーを喜ばせようと言わんばかりに蠢き、身動き取れない肉竿の雁裏や裏筋までもが執拗に舐めくすぐられる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!